十文字学園女子短期大学研究紀要第24集　1993年

DOUBLE/ 想像上のそして幻想上の自己(文学と精神分析)*

大　原　知　子**

理性は感情の奴隷である。それ故感情体験を合理化するために存在するものである。W.R. ビオン

I．他人の中の自己

自己所有／自己喪失

フロイト，顎の手術という報せにルー・アンドレアス・ザロメが書き送った手紙に対し，彼はルーの悲嘆に驚き面食らって以下のように返事している。

「あなたは壁に頭を打ちつけている。何故？　私たちを人生の外に運んでしまう道程の凹凸の部分を私がまた辿ったからですか。(・・・)このことは，それが例えどんな流儀であろうとも，予め分かっていることですし，避けられないものであり，持続していくものなのです。それは次のようにさえ言えるでしょう。延命という仮の，そして出発という決定的な側面は，今ほど私にとって良く知覚でき，身近に感じられたことはありません。人間にとって貴重に見える多量の物事を自分が所有したという事実が，名残惜しさのあらゆる表現に対立して思い浮かんで来るのです」(注1)

この75歳のフロイトに見られるのは，時の流れに自己が刻んだ足跡を手繰り寄せる，つまり，過去の自己を現在の中に所有している姿であろう。ここには勿論，“見失った時”もなければ，“失われた自己”の概念もない。自己は現在にまで脈脈と連なっているのであり，自己が時の中に築いた足跡を何か成果のようなものとして所有している幸福な意識であろう。しかし，ここで取り上げたいのは，時間と生物の理を認めたこの“健全な”自己認識の側面ではなく，またプルーストが『失われた時を求めて』の最終巻に描く，ジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』に纏わる“就寝劇”の自己の蘇り，感情を含めた当時のありとあらゆる形象界の蘇りをあたかも一つの“魔法の壺”の如く引っ提げ持った自己，つまり“あったもの”，“見出したもの”という概念からの自己でもない。それはこれら所有の概念に基づいた自己ではなく，フロイトが導入した同一化 (identification) の概念，そしてそこからメラニー・クラインが発見し，理論化し，その後，ビオンを経て，現在のイギリス精神分析界でその着実な研究成果を示している“投影同一視”(projective identification) の概念の周辺に纏わる現象，現実の私たちに，心理的にであれ，物理的にであれ，また生物学的にであれ，欠けており，私たちに

---

*Double/Le moi fantasmatique et imaginaire : littérature et psychanalyse

**Tomoko OHARA　共通基礎部門

“見えない自己”の存在となってその姿を追わせる，言わば，所有感覚以前の自己である。それは肉体のない自己，形のない自己といおうか。

確かに先に挙げたフロイドの健全な自己所有の気持ちとは対照的に，自分の中の何かが失われているという感触，即ち自分が十全に生きていないという印象は誰しも一度は味わう機会があるに違いない。またそれと相まって、肯定的には他人に対する憧れが否定的には妬みの感情が出会う対象によって生じて来たりする。勿論これは正直になった時点での印象であり，前者の場合は“欲求不満”(frustration)，後者の場合は感じが良い，感じが悪い，あるいは喜びだったり不快感だったりと言った表面的な所に止まっているのが我々の日常感覚ではないだろうか。

「これは“親しい存在がいない”という客観的な条件から来る孤独を扱うのではない」と前置きをした上で，メラニー・クラインはその最後の論文(注2)で私たちの孤独感について述べている。それによると孤独感というものは私たちの中の分裂メカニズムに負っており，その中で私たちが意識の中から追い出してしまった自己を懐かしがっている／取り戻せないでいる状態だとしている。

> Some of these split-of parts (…) are projected into other people, contributing to the feeling that one is not in full possession of one's self, that one does not fully belong to oneself or, therefore, to anybody else. The lost parts too, are felt to be lonely (p. 302).(注3)

> これら分割されてしまった自己のある部分は他人の中に投影されてしまい，自分が十分に自分自身を所有していない，自分自身に完全に所属していない，従って誰か他人には尚更のこと所属することなどない，という感情を私たちに持たせるのである。これら失われてしまった私たちの部分もまた孤独であると私たちには感じられるのだ。

このような状態にいる私たちにとって他人とは，外に投影された自己の様々な影を受けた他者である。そしてこの言わば他者の“仮面”を付けた私たちが，現実には他人として私たちに接触している。この心理メカニズムをクラインは投影同一視作用 (indentification projective)(注4)と呼び，その中においては，真の対象の存在は希薄で，本来ナルシスムに基づいた関係であるとしている。従って，他人の中に映る自分の影，それが憧れの下にやって来たとしても，また幻滅という仮面を付けているにしても，確かに時の流れの中に私たちが手放し，他人という空間の中で生きている自己の部分に違いない。そしてこのような言わば“自己流出”が極端になれば，自分が“盗まれてしまっている”という気持ちさえ運んで来よう。同論文で，クラインは私たちの中にある“自分自身を理解したい”という欲求についても触れ，“双子を持つ”という良く見られる幻想は，その一つの表現方法であるとしている。

だが，この私たちと遮断され，私たちと繋がりのない筈の“自己が寂しがっている”，これは一体どういうことであろうか。私たちの生から飛び出してしまったこの存在は私たちを越えてどんな場所に存在しているというのだろうか。そして呼び掛けて来るとしたら一体どういう風

に？　ここで以下のバルザックの手紙を読んでみよう。

(…) Il est reconnu que [l'artiste] n'est pas lui-même dans le secret de son intelligence. Il opère sous l'empire de certaines circonstances, dont la réunion est un mystère. Il ne s'appartient pas. Il est le jouet d' une force éminemment capricieuse.

Tel jour, et sans qu'il le sache, un air souffle et tout se détend. Pour un empire, pour des millions, il ne toucherait pas son pinceau, il ne pétrirait pas un fragment de cire à mouler, il n'écrirait pas une ligne; et, s'il essaye, ce n'est pas lui qui tient le pinceau, la cire ou la plume, c'est un autre, c'est son double, son Sosie : celui qui monte à cheval, fait des calembours, a envie de boire, de dormir, et n'a d'esprit que pour inventer des extravagances. (注5)

〔芸術家〕自身が自らの知性の秘密の中にいるのではないということは周知のことであります。彼はある種の状況の支配の下に筆を動かすのであり，それらの状況を繋ぎ合わせることは一つの神秘なのです。芸術家は自己に属していません。彼は極めて気まぐれなある力の玩具なのです。

然々の日，そしてそうと知らないうちに，ある大気が息を吹き，全てが緊張を解き放たれます。芸術家は一帝国と引き換えに，何百万フランと引き換えに，自分の絵筆を取ったり，一断片を鋳造するための蠟を捏ねたり，一行書いたりする訳ではないのです。そして，もし彼が仕事をやってみるとすれば，絵筆や蠟やペンを取ったりするのは彼ではなく，他者，芸術家の分身，彼のソジーなのです。この彼のソジーが馬に乗り，駄酒落を言い，飲んだり眠ったりしたがるのです。そしてこのソジーは突飛なことを思いつくことしか念頭にないのです。（ズルマ・カローに。1831年3月）

「然々の日に，ある大気が息を吹き，全てが緊張を解き放たれる」。これは確かにプルーストの“マドレーヌ菓子”，“ゲルマント館の不揃いな敷石”等が語り手に伝えた謎の喜びと同じ種のものであろう。そしてプルーストがそこに包まれていた過去を蘇らせたとすれば，バルザックはそこにいた自分をソジー（自分と瓜二つの存在）として彼にあらゆる自由を与えたに違いない。言わばプルーストは損なわれた時間を“返して”やり，バルザックは遮断された空間を“与えて”やったのだ。

Je me couche à six heures du soir ou à sept heures, comme les poules; on me réveille à une heure du matin, et je travaille jusqu'à huit heures; à huit heures, je dors encore une heure et demi; puis je prends quelque chose peu substantiel, une tasse de café pur, et je m'attelle à mon fiacre jusq'à quatre heures; je reçois, je prends un bain, ou je sors, et après dîner, je me couche."

僕は夕方6時から7時に寝ます，雌鳥のように。朝の1時に起こして貰い，それから8時

まで仕事をするのです。そしてまた1時間半眠る。それから何かあまり栄養のないもの，ストレートのコーヒーなど一杯飲み，4時まで仕事に精を出します。それ以後来客に会ったり，風呂に入ったり，あるいは出掛けたりします。それから夕食，そして寝ます（ズルマ・カローに，1833年3月）

自分は紙という空間の中に，ソジーは実際の現実の中に身を置く。閉じ籠もった知性が本能を果てしのない空間の中に送り込み，“突飛な”活躍をさせるのだ。そして，病の床で“ビアンションが来てくれたらなあ”と自分の創作人物である医者の名を口にするバルザックにとって，このソジーは確かに無二の親友だったに違いない。

この“分身”というテーマは，ヨーロッパの文学界で“double”，“sosie”，“alter ego”などと様々な言葉を与えられて，登場して来た。カフカの初期の作品集，『観察』ではそれは子供の幽霊となって主人公の部屋を訪れている。そしてこれらソジーの語に表される存在は創作という言わば昇華作用の空間における，そしてそれ故具体的になった存在だけではない。それは表現を“ソジー”から“双子”に変えて，時間／空間ずっと彼方の存在から我々に呼び掛けて，時に私たちの日常生活の意識を曇らす存在であるのだ。双子は時間も空間も共有し，改めて私たちにその存在を意識させることがないからである。この点の違い，あるいは推移をイギリスの精神分析医ビオンの症例，“想像上の双子”を挙げて，作家たちが意識した“分身”の存在の手前，即ち想像物として名を持ち，その誕生が許される以前の心的空間，私たちの意識や知性から隔たり幻想となって名を持たずに出現して来るものの存在を見て行くことにする。分裂病患者の症例という私たちにとっては極めて難解な世界だけに，この症例に関するメラニー・クラインの評を予め挙げておけば，「この双子のイメージとは分裂作用によって自己から切り離され，自らに不可解になった私たちの失ってしまった部分を表しており，自己の充実感と完全な理解を実現させたいという希望の内に，取り戻したいと願っている部分を示している。これらの部分は時には理想的な部分として感じられる。双子はまたある時には完全に信頼できる，言わば理想化された内的オブジェを示しているのである」(注6)。

想像上の双子

これは1950年のイギリス精神分析協会において口頭発表されたビオンの論文であり，その後，学会誌に掲載された他の論文と共に『Second Thoughts』というタイトルで1967年に出版されたものである(注7)。ビオンはメラニー・クラインから分析を受けており，従って自分の臨床経験から独自の方法論を体系化する以前の彼の初期の論文には師であるクラインの“投影同一視”はもとより，“内的オブジェ (internal object)”，“分割作用 (splitting)”，“迫害・分裂ポジション (paranoid-schizoid position)” など彼女の様々な概念が極めて身近に応用されており，特に“伝染恐怖症”で示される患者の内的世界から出現するオブジェの正体を次々に明かしていくことに，私たちは何か推理小説を読んでいるかのような心境にさせられ，分析医のテクニックの絶妙さを見る思いのする論文であるが，ここではそれらのオブジェから私たちのテーマに関係した“双子”に絞って要約・紹介することにする。

この書の後書きによると，論文の患者は精神分析を受ける前にすでに長期に渡って心理療法

を受けていたが改善は見られず，最終的には脳手術を受けるよう勧められていたと言う。

ビオンのA(注8)と名付けられたこの患者は43歳の男性で職業は教師となっている。最初の2年間の分析は彼の“汚染恐怖症”を主な話題としてさして大きな改善も見られずに進んで行く。それに対し，ビオンは自分の分析はAに単に以下のような反応を引き出すに過ぎないと感じる。「頑なまでの無関心さ。そして分析医としての自分は，まるで自分の手に負えない一人の子供に無駄な励ましや忠告を与えている家族のようだ」と。そしてその印象をAに告げた段階で，患者の態度は一変する。この変化の局面は二つのリズムで構成されており，一つは退屈そうな意気消沈した態度，もう一つはビオンの答えを計算して“さあ，言いなさい。今度はあなたの番ですよ”とでも言うかのような，ちゃんとそのための間を挾んだ愉快そうに喋りまくる連想の嵐。この二つの態度が共存していた期間の中で，ビオンが気がついたことは，Aのお喋りは分析医側の決まりきった古い解釈を狙った古いタイプの連想に過ぎず，分析がまるで言葉のゲームと化してしまうということだった。そして分析医がこのリズムを破ると，Aは苛立ったり不安に駆られたりする。患者自身もこのことに気がつき，“一体，分析が何になるのだろう”とその効果に疑問を示すようになった段階で，二人の間で分析の方法を変えるかあるいは医者を変えるか話し合うが，その中で分析に関連した要素の中に，患者の兆候を軽くするものが存在していることにビオンは気がつく。それは例えば“頼れる誰れかがいる”という感情から得られる患者の安心感というものだった。黙ってしまった患者に対しビオンが「今，何を考えているのですか」と尋ねた時の患者の答えから大局面が展開する。だがこの大局面を語る前にビオンは当時自分自身そうと分からなかった，だが実はこの局面に深く関連していた以前の分析材料の特徴を挙げている。それはAの夥しい交友関係が話題になる場合，彼はしばしば“X氏に話し掛けようと思っていた時”，“Y夫人と話していたとき思っていたことは”という導入の仕方をすることだった。ある時分析医にそれを指摘されて，Aは“いや，話し掛けようと想像していただけですよ”と答えた。ビオンにはこの患者の話すこと全部がそうだという訳ではなかったが，そこにあまり現実と想像の境界線がないように思われた。

Aの話題に登る人物は“同じ歳で同性愛者の義兄”，“テニス仲間”，“不愉快な同僚”など多数いたが，その中で頻繁に登場して来るのは，年齢，職業，家庭条件それに病気の兆候までAと同じの一人の男だった。この男はAが少年時代まで過ごした大陸にまだいて，そこで精力的に働いており，誰も彼が病気だとは気がつかないというものだった。そしてこの男はAには不可能なこと，何処にでも自由に旅行するということができるのだ。Aがこの友人に対して自己を低く評価していることは明らかに見てとれた。

以上の挿入をした上でビオンは先に挙げた自分の質問に対する次のような患者の答え，そこから生じた二人の遣り取りを紹介する。Aの答えとは，即ち，Aが分析が何になろうとその治療を疑い，続けようかどうか迷っている“現在”考えていることは“リューマチで苦しんでいるある女性”のことだった。

A：「彼女はいつもあれこれ不満を言っている。僕は彼女が神経症じゃないかと思いますね。それで彼女にアミタールを買いなさいとアドバイスしてそれを送ってやりましたよ」。

ビオン：「今あなたの言ったことは，恐らくあなたが私の治療から受けている印象を要約したものでしょう」と。医者の分析はAにとってさして注意を払わないでいい何か漠然とした不満

のように感じられており，Aの連想はと言えば，その多くは陳腐なもので，そこから情報を提供するという価値として使われるより，むしろアミタールと同じ催眠剤の効果のために使われ，この（分析）医者としての私を，Aを悩ますことなく使うという目論見からのものだと。

だが，ビオンはこういった状況がいかにAをA自身に対して我慢できる存在にしているかに注目しなければいけないと考え，“連想―分析―連想”と言ったリズムを取るAの振る舞いの特殊性に患者の注意を向け，次のように言う。「この“連想―分析―連想”が示すものは，私があなた自身の双子になっているということですよ。そしてこの双子は私（分析医）の不平不満に対し，陽気に逃げて，その逃げ場の中であなたを支えているんです。そしてそうすることによってあなたの恨みを和らげているんです。あなたはこの3つの役割のいずれにも同化出来るんですよ」。分かりやすくするために，ここで説明しておけば，この医者側の“不平不満”とはAのお喋りに対するビオンの分析／解釈，つまり普通の病気で言えば，治療のことである。

分析環境において，医者と患者の関係とは患者の無意識の幻想世界から成り立っており，患者にとっては一番密度の濃い感情，言わば肌にぴったりとした空間である。だが，このビオンと患者の遣り取りにはクラインの“投影同一視”の理論を参考にしなければなるまい。つまり上に挙げた段階で，Aは医者に自分の姿を投影しているのだ。そして投影され医者に姿を変えた自分が今度は自分に語り掛けて来るのである。Aにとってまだ意識化されていないこの作用に基づいた関係が，実生活におけるAの行動であり，それが医者のもとで凝縮した形を取るのである。患者の日常に生じる様々なエピソードは，全てこの関係のヴァリエーションに過ぎないことになる。従って，患者が話題にした“リューマチで苦しんでいる女性，そして年中あれこれ不平不満を言っている女性”とは患者がその中に自己を眺めている存在，更に詳しく言えば，分析医にそう捕えられているだろうと思っている患者自身の姿なのである。つまり持病があって，尚あちこち悪くそれに対して所中不満を零しているという自己の姿なのだ。従って“彼女にアミタールを送るA”は現実の分析医／ビオンにではなく，自分がそうと捕らえた分析医に同一化した自己である。Aの無意識が現実生活のレベルで描く行動なのだ。また投影と言っても全てを投影する訳ではないから，Aは自分の病気に実際うんざりしている自己にも気づいているのである。そしてこの彼女にアミタールという催眠剤を送ってやることは無意識の行動化であり，本来は自分にそれを送っているということになるのだ。

以上のことを要約すると，Aの頭の中でビオンの分析はアミタールと同じ効果しか持たない，Aの病気に対して，この“分析医”はその程度の治療でいいと思っているのだ。こうした患者の，現実の行為の奥に存在している考えとは，彼の気持ちの中で，分析医はA（の症状）にうんざりして不満を抱いているのであり，それでも痛みを和らげるために催眠剤を出してやるが，病気（現実ではそれは“ある女性のリューマチ”にすり替えられているが）自体から来る不満にさして注意を払わない態度を示している。私たちの言葉で言えば，Aの医者に対する“思い込み”の気持ちが今度，現実に医者に対してどんな態度を取らせるかと言えば，それは，自分の言うことが医者の分析によってあれこれ自分を悩ませる情報にならないよう，陳腐な従って医者に分かり易いどうでも良い事を伝えてやっているだけであり，一方，価値のある情報を与えて医者を悩ますより，催眠剤の役割を狙ったものに止めておこうという気遣いをしているのだ。A自身，想像の中で①治療に不満を持っている病人②病人に煩らされている医者③

病気という自分の不満で医者の恨みを買わないため，医者を煩わせまいとする患者，これら3つの役割をしているのである。勿論，この中で医者も自分もある心理の中での入れ替え可能な役割に過ぎず，現実の相手としての医者の存在はない。これを“あなたにとって私はあなたの不安を和らげるかのようなあなたの片割れの双子にすぎませんねえ”と指摘された時の患者の態度は，分析医／ビオンを茫然自失の状態に置くほどの変化を取った。この“双子”という言葉と共にビオンの前には，分析の初日と全く同一の，感情表現の一切見られない硬直したAが存在したのだった。

この分析医の口から偶然のように出た“肉親”と“双子”の言葉が引き起こした患者の心的変化は翌日，患者に夢をもたらす。

「Aは車を運転しており，正に別の車に追いつくところだった。同じ位置に来た時，追い抜く代わりに注意深くそれと平行させた。相手の車は徐行し，止まった。Aもその動きに従う。そこで二台の車は隣接して駐車することになった。相手は直ちに車から降りて来た。それは殆ど彼と同じ背丈の男で，Aのドアの周囲を歩き回りそこにずしんと寄り掛かった。Aはと言えば，反対側のドアはすでにブロックしており，相手の車と隣接して駐車したせいで，逃げることが出来なかった。一方相手の男はAのドアをブロックした。彼はAを威嚇するように窓から睨んだ。Aは恐怖のうちに目覚め，起きている間中，強い不安でいっぱいだった」

ビオンはこの威嚇する男とは患者が前回で話した想像上の双子であり，分析医自身であると言う。双子が想像上の存在であるのは，Aがその誕生を遮ったからであり，事実，Aには双子は存在していない。従って，不安を軽くする手段としてAが使う双子とは権利のない存在であり，この権利のない双子が剝奪された権利の仕返しとして，今やAが生まれて来ないよう，言い換えれば，Aに自由や独立を達成させないように決心しているのだ。このようにしてAは双子によって，それからこの双子のすぐ側に車を止めるという自分の行為によって閉じ込められているのである。夢の中の車は分析の世界のことであり，私（分析医）はそこから現実の存在として出て来ることが許されてなかったのだ。夢は前回の双子の登場によって引き起こされた彼の恐怖を示している。それは今まで“生きていなかった”分析医が分析から逃げようという彼をブロックさせる役割で実在することになったのだ。つまり内的存在から始めて自分の外に生きる一人の人間という外的オブジェになったのである。分析医はもはやAが自分の願い通りの姿を取れる双子ではなくなった。だが，同じオブジェに今度Aは自分が切り離したいと望んでいる自己の悪い部分の化身の役割を負わせたのだった。

この夢分析の解釈にもまた，母親の子宮に関する破壊幻想や，反坐法などごく初期の幼児心理に関するクラインの論理が必要となるであろう。つまりこのAというビオンの患者にとって双子とは想像の中で常に自分が語りかけることが出来る存在，自分を保護してくれる存在であると共に，自分がその誕生を妨げた故に，自分の現実存在をも妨げるものでもあり，夢は分析医が今度悪い方の双子になったことを示しているのだ。そしてこの患者は自己のこうした“双子”の存在を分析医から指摘されて始めて，自分の投影同一視作用から独立した分析医の存在を認めることが出来たのだ，例えそれが自己に分析治療という苦痛を運んで来る存在だったとしても。そしてそれと共に潜在的にしか存在していなかった自己のありとあらゆる苦痛に直面することになる。そしてこのような心的状況の段階で，外の世界は失った自己の部分を映し出

す様々な機能を担う記号に過ぎなかったことを理解するのだ。

自分がその誕生を“妨げた”双子，そしてその双子から彼が仕返しを受け，現実に生きる権利のない状態にあるならば，彼はこの双子を生かせてやらねばなるまい。つまり自己の否定した部分に光を当ててやるのだ。だが，この道程は容易ではない。拒否した自己を受け入れるのはそう簡単なことではないからだ。分析医に投げつけそこから弾き返された自己の片割れは，従って現実の中で次々にその宿る空間を見つけていくことになる。そしてこの過程で内なるオブジェの宿り場はリューマチの女性という自己の病気への漠然とした意識を示すものから，自己に塞がれた機能を具体的に負うものへと変化して行く。この双子の次に登場するのは，休暇中に彼の仕事を受け持った臨時雇いである。「自分が休みから戻ってみたら，案の定，彼は未経験故のヘマばかりしていた。生徒の親を無駄に心配させた」というAの話にビオンは臨時雇いに対するAの心配が休暇に入る前から存在していたことを確かめ，Aの不安や責任感は“臨時雇い”を使っても取り除くことは出来ないものであることに気づかせる。つまり自己の不安など自分の“代替”として外の存在に投影しても解決にはならないということを教えてやるのだ。そしてここでもまたA自身がそうと知らずに自己にしている評価“ヘマばかりしている未経験者”という姿を示してやる。一方“文句を言う親”とはこの「未経験故のヘマばかりしている臨時雇いを引き受け一緒に取り残されて不満を言っているビオンのことであり，この分析者はそんな事を引き受けた代償としてAを動転させるようなことを何でも言えることになっているのだ」と説明する。そしてもしAが“経験者”として分析医の所に来ると事はどうなるのかと。そんなことはAにはとても不可能であると。分析はこの段階にあってエディップ・コンプレックスに入っており，それはテーマではないので省略するが，一つ説明を加えておけば，両親の性の違いに対する患者の混沌とした心理を示すため，ビオンはAの所有形容詞の使い方をそのまま忠実に記述している。つまり素材として出された生徒の親が男親か女親かはっきり示されないままになっているのだ。従ってAがどちらの親に恐れを抱いて自分を“未経験者”にしているのか患者自身にとって漠然としているが，ここではエディップの心理がAに見つけさせる外のオブジェを通してその不安を見るだけにする。

分析医の説明に，Aは「まるで体をくるめられているようだ，このままいると痙攣が起こりそうだし，体を伸ばせば硬直状態になり，自分がまるで子宮の中にいるようだ」と語る。ビオンは子宮とは本業の“代替”として臨時に来ざるを得ないようAが自己に押しつけた限界の世界を示していると説明する。そしてビオンはこれらAの態度が自分という分析医を初めとして他人の憎しみを引き寄せないため，自らの攻撃本能を押さえつけていることから来ているのだと教える。それで，翌日Aの見た夢は「ある男がAに請求書を寄越した。そして家を出て行った。請求書はばか高い額で，Aは文句を言うためにその男を追い掛けるが，男は肩を叩いて注意を引こうとしたAの行動を無視して素早く消えてしまう。Aはかつて経験したことのなかった強い怒りを感じ，恐怖のうちに目覚める」。ビオンは昨日の分析材料，“もし，くるまっている姿勢を止めたらどうなるのか”というAの恐れを思い起こさせ，分析医に持つ憎しみ，また分析にかかる費用への怒り等，Aが持っている憎しみを理解させるのである。

Aの双子はこの“臨時雇い”から更に“二人の目医者”に変化して，そこでエディップ・コンプレックスの憎しみという苦痛の最大の山場を迎えるのだが，Aがそれらに耐えられるよう

になったのは，双子のイメージをきっかけにしてAが現実世界をテストして見るという態度を取れるようになったからだとビオンは説明している。それまでの分離された自己の投影が受けたオブジェとは違った世界がどんなものであるのか，内的オブジェの妨害と戦いながら。

それでは患者の連想に現れた他の様々なオブジェの中から何故，ビオンが“双子”をタイトルに選んだのか。それは今まで形をなさないで存在していた感情に始めて意識化が行われるきっかけとなったイメージであり，患者に内的オブジェの存在を知らせる言わば意識革命のような役割を果たしたからである。そして後にビオンは“双子”が現れる以前に患者の中に生じた多くの不安の出所は，分析医が患者を単に彼の連想ばかりにではなく，内的現実の世界に向けていたことに負っていたと理解するのである。またこの症例は私たちに分析医への患者の感情を通して私たちの中にある様々な感情存在の混沌とした状態を垣間見させてくれる。この患者にあって，例えば愛の存在とは自分のことで負担をかけまいという見ようによっては被害妄想とも取れる医者への気遣いとなって表現されている。また苦しんでいる自分を“直してくれない”相手に向かって患者の憎しみは潜在しているだけであり，まっとうには出て来ない。むしろ，憎しみを抱いている自分を悪者にし，医者に向かって気遣うのである。これらの気遣いが“正確な情報”とはならずに，逆に分析の進展を妨げる結果になるのだが。“あなたは自分の憎しみが怖いのでしょう”即ち，自分の憎しみに自らの権利を与えていないことを医者に指摘されて始めてこの患者は自分が怒りまくっている夢を見ることが出来たのだ。

確かにこの双子が“誕生”する前まで，ビオンのこの患者は幻想の中で生きていた。決して外の陽を見ることのない言わば胎児の状態でオブジェは全て内部にあり，外のものはそれへの栄養摂取に消えて行く。幻想が幻想を孕ませるのだ。そして“内に止った”この名付けられないものが「相手」に捉えられ，自己に戻って来た時，私たちは初めて外的世界の存在を知ることになる。即ちここで自己の幻想の意識化が行われたのだ。

私たちの内部から来るものが幻想だとしたら，少しでも認識のある外の対象に内部世界を投影するのは想像と言えよう。だが想像する私たちに対し，外の世界は自らを様々な形に変えて投げ返し，それが私たちの内的オブジェと違うことを示してくれる。自己の投影と外の対象の間に生じた，この意識の濃淡の世界を，それでは作家たちはどのような心で描いていくのだろうか。

バルザックの日常が，夜中に起き，夜の静寂さとランプの光，それに珈琲の影響下という可能な限りの人工の帝国とも言える空間に身を置いての仕事の生活だったとは先に挙げた手紙にも窮われるが，書くという行為は彼にとって何かの代償，自分の分身を紙の上に生かせるという心の作用にもあったのである。だが，それは一体，具体的にどんな心であろう。

> L'égoisme de l'homme qui vit par la pensée est quelque chose d'affreux. Pour être en dehors des autres, il faut commencer par s'en mettre réelement en dehors. N'est-ce pas un martyre pour un homme qui ne vit que par l'épanchement des sentiments, qui ne respire que tendresse, et qui a besoin de trouver sans cesse près de lui une âme pour asyle, de méditer, de comparer, d'inventer, de chercher sans cesse, de voyager

dans les espaces de la pensée, quand il aime à aimer ?

思考によって生きている男のエゴイズムには何か恐ろしいものがあります。他人の外に存在する人間であるためには，現実に外に生きることから始める必要があります。感情が流れるままに生き，優しさだけを呼吸し，そして自分の側に逃げ場としての優しい心の持ち主を絶えず見つける必要のある男に取って，愛したいと願う時，熟考したり，比較したり，作り出したり，絶えず探究したり，思考の空間の中を旅したりというのは，殉教の苦しみというものではないでしょうか」（ズルマ・カローに。1831年3月）(注9)

このバルザック32歳の時の気持ちが後の，第一人称を捨て去り客観に徹した作法を取る作家としての円熟期の彼と基盤の上で変わらなかったとは言えないだろう。だが，ここにバルザック50歳，ハンスカ夫人との結婚を控えた時の母親に宛てた手紙を見てみよう。愚痴を告げる母親の手紙に対して，

(…) il faut qu'il me tombe une lettre, qui, moralement parlant, fait l'effet des regards irrités et fixes avec lesquels tu terrifiais tes enfants quand ils avaient quinze ans, et qui, à cinquante ans que j'ai malheureusement, manquent tout à fait leur coup (…). Je ne te demande certes pas de feindre des sentiments que tu n'aurais pas, car Dieu et toi savez bien que tu ne m'as pas étouffé de caresses ni de tendresses depuis que je suis au monde. Et tu as bien fait, car si tu m'avais aimé comme tu as aimé Henri, je serais sans doute où il est, et, dans ce sens, tu as été une bonne mère pour moi. (注10)

士気の上から見て，（手紙は）僕に母さんの苛立ったそして据え付いた視線という効果を与えたんですよ。それでもって母さんは僕たち子供が15歳だった時に，僕たちを震え上がらせたんだ。そして生憎50歳になった今の僕にとって，それは全て的が外れているんですよ（・・・）。僕は母さんが僕に持てっこない感情を装ってくれなどと頼んでいる訳ではないんです。何故なら，僕がこの世に生まれてこの方，母さんが一度だって愛撫や優しい心で僕を抱きしめてくれたりしたことがなかったのは，神さまと母さんが良く知っているんだからね。そして母さんは本当に良くやったんだ。というのはもし僕がアンリのように母さんに可愛がられていたら，僕は恐らく彼のようになっていたでしょうから。そしてこの意味では母さんは僕にとって良い母親だったんですよ」（1849年３月）

50歳になっても母親に昔の怨恨を書き送る作家の子供時代のフラストレーションとは何だったのか。ここでバルザックの生い立ちを問題にするつもりはないが，それでも母親の不寵という思いの下に押しつぶされた生がソジーとなって紙の上に躍動するという形が先に挙げた女友達への手紙で告白されていると言えるだろう。だが，ビオンの双子と違って，バルザックは自分のソジーに存在を与えてやるために“外に出て”行くのである。バルザックにとって外の世界とは，自分の心を試す場のみならず，自分の心により豊かな体験を与えてやるための世界

だったと言えるだろう。ここで私たちは分裂症患者の対象不在のナルシスムの空間から創作者の世界に移って，改めて Double のテーマを見ていくことにしよう。

FEMININ/MASCULIN

Double のテーマを生み出すものが，手放してしまった自己を懐かしがっている私たちの心から来るものであることは先に見て来たことである。だが，この自己に欠けているものの現実の形，あるいは取り返しのつかない例は異性の存在であろう。これは私たちに物理的に欠けているからである。そしてこのことはバルザックに『セラフィータ』を書かせ，フロイトに恋愛におけるナルシスムの問題を考察させた(注11)。そしてこの“自己の中に具体的に欠けている自己”，即ち異性の問題を考えるには，プラトンの『饗宴』の中で語られるかの有名なアリストファネスの神話，即ち男女両具性の存在 (androgyne) について触れねばなるまい。ここでプラトンはアリストファネスの演説を導入させて，第三の種類の人間，即ち異性愛について語っている。

『または愛について』と題されたこの『饗宴』でアリストファネスは，人間の祖先はかつて3種類だったと語る。つまり今の男，女の他に，“男女”というものがいて，彼らは男の属性と女の属性を持っていた，とする。つまり肉体的には「頭と胴体は一つだが，顔は各々逆に向いたものが二つ，手と脚も二つづつ，恥の部分も二つ所有していた」という。この三番目の“男女”の種族は大変強く，また傲慢で神々に攻撃をやめなかったので，ついにゼウスが怒って思案した挙げ句，アポロンに命じて彼らを半分にしてしまったというのである。「さて，この人間の本性がかくの如く半分にされてしまったところで，彼らは自己の半身を恋い慕い，それと合体した。彼らは各々の半分と，腕と腕を取り合い，一体として同化したいという欲求の下に互いに抱き合っていたが，飢えから，結局のところ，片方なしには何もしたくないという無行動のせいで，ついに死んでいってしまったのである」(注12)。

この第三の人間の種類に起こったことからアリストファネスは私たちの愛の形態を次のように結論する。「かくの如くして，すでにこれほど昔の時より，自己に似た者に抱く愛が人間に植えつけられたのである。愛とは私たちの原始的な本性の再構成者であり，二人の人間を一人にしようと，言い換えれば，人間の本性を癒すよう試みるものなのだ。半分にされて，カレイに似た，私たちの一人一人が一人の人間を補う片割れなのだ。二人にされた一人の人間なのだ」(注13)。

「自分と似た者に抱く愛」，ソジーに対する私たち本来の憧れが仄かな木霊となって遠いギリシャから伝わって来るかの如き提議である。だが，ここではそれが異性となっていることに注目したい。それは，人間が昔は持っていた，だが今はない本質の統合という問題が愛の様相に係わっているというものではないだろうか。つまり，我々人間は愛の対象を通して不均衡さから癒され，健康な個人になれるのだ。そして，このアリストファネスの神話を心理的に眺めてみると，次のようなことが言えないだろうか。つまり，かつて生物的に持っていた異性の存在は，思い出として抽象的なものに変化して行き，それは，言い換えれば，性の具体性から解き放たれた異性のエレメントとなって私たちの中に存在し続けていると。そして私たち男女の区別は，私たちの傲慢さと攻撃性のせいで神によって二分化された結果であり，この世で引き起

こされる様々な問題はこの二分化というものに基づいているのだ。これが『饗宴』の中でソクラテスに到るまで会席者たちによっていろいろ定義された愛についてのディスクールに於けるアリストファネスの意見で，しかもその出番は当人の“しゃっくり”や“くしゃみ”の妨害で延期され，その上，後のソクラテスの話に口を挟もうとする彼の意見は酔っ払いや笛吹きの介入で妨害されるという構成になっている。そして『饗宴』自体はソクラテスの人物や行動に関する叙述が愛の醍醐味として描かれ終わりを飾っているのだが，しかしこういった喜劇作家に相応しい，あるいは同性愛者たちの間に紛れ込んだ異性愛者に押しつけられた“滑稽な存在”という粉飾の枠組みを取り除き，一つの独立した考えとして見た場合，このアリストファネスの“男女”の概念はそう突飛なものではない。何故なら，アンドロジーヌへの憧れは例えば，次のバルザックの小説に見られる如く，近代に到るまで絵画や文学等の素材として様々な形を取って登場しているからである。

さて，アリストファネスが神々に悪さをしたため二分化されてしまったという私たちの性の現状を語ったのに対して，バルザックの『セラフィータ』に登場するのはノルウェーのフィヨルド地帯を背景に，正にこの二分化以前の存在，もしくは男女に“二重化”された存在である。第一章が男性の“セラフィトゥス”で土地の牧師の娘ミンナと一緒に，第二章が女性の“セラフィータ”で旅行者で6か月以来そこに滞在しているウィルフリッドなる男とのやりとり，そして第三章が“セラフィトゥス—セラフィータ”となっていて，このアンドロジーヌめいた神秘的な存在の出生が説明されている。因みにミンナを去るセラフィトゥスの“性転換”めいた箇所を挙げると，

> Minna tressaillait en entendant la voix, pour ainsi dire nouvelle, de son guide : voix pure comme celle d'une jeune fille et qui dissipa les lueurs fantastiques du songe à travers lequel jusqu'alors elle avait marché. Séraphîtus commençait à laisser sa force male et à depouiller ses regards de leur trop vive intelligence. (注14)

> ミンナは自分の導き人の，新しいとも言える声を聞いて戦いた。それは若い娘のような混じり気のない声で，今まで彼女がそれを伝って歩いて来た夢の幻想的な仄明かりを追い払ってしまった。セラフィトゥスは男の力を捨て，その目からあまりにも鋭い知性を拭い始めた。

私たちの仕種や性格の様々な形の中で，何をもって男女に分けるかは場所や時代，そして個人の尺度に依るであろう。だが，ここでは寧ろ“融合”，“完全性”という枠で捉えるべきである。というのもこのセラフィータ／セラフィトゥスなる人物を熱烈に愛する二人の男女も彼（女）の前では一人だからである。ウィルフリッドを前にセラフィータは語る。

> Je vous aime bien, vous et Minna, croyez-le! Mais je vous confonds en un seul être. Réunis ainsi, vous êtes un frère, ou, si vous voulez, une sœur pour moi. (注15)

私はあなたたちが好きですよ，あなたとミンナを。そのことを信じなさい！　けれどあなたたちを混ぜ合わせて唯一人の存在と思っているんです。このように二人が一緒になって，あなたたち二人は私にとって，一人の兄（弟），もしくは（姉）妹となるんです。

だが，このアンドロジーヌの存在にバルザックが与えるのは“天からの追放者”，“試練と苦しみの地上を永遠に去る前”の状態におかれている次のような“天使”の条件である。

Les anges sont toujours dans le plus parfait de la beauté. Leurs mariages sont célébrés par des célémonies merveilleuses. Dans cette union, qui ne produit point d'enfants, l'homme a donné l'ENTENDEMENT, la femme a donné la VOLONTE : ils deviennent un seul etre, UN SEUL chair ici-bas. (注16)

天使たちは常に美の最も完全さの中にいる。彼らの結婚は驚異的な儀式によって祝われる。子供を生み出さないこの結合の中で，男は悟性を与え，女は意志を与えた。彼らはただ一つの存在，この地上にあっては単一の肉体になる。

そして地上の私たちに取って，このセラフィータ／セラフィトゥスが与えるものは眩暈と深淵である。以下は山，川，森そして海までが氷の中に凍結し，天と地，海が区別の付かない灰色の景色の中をセラフィトゥスとミンナがファルベルクの山頂目指して登って行く場面である。

Par une matinée où le soleil éclatait au sein de ce paysage en y allumant les feux de tous les diamants éphémères produits par les cristallisations de la neige et des glaces, deux personnes passèrent sur le golfe, le traversèrent et volèrent le long des bases du Falberg, vers le sommet duquel elles s'élevèrent de frise en frise. Etait-ce deux créatures, était-ce deux flèches? Qui les eût vues à cette hauteur les aurait prises pour deux eiders cinglant de conserve à travers les nuées. Ni le pêcheur le plus superstitieux, ni le chasseur le plus intrepide n'eût attribué à des créatures humaines le pouvoir de se tenir le long des faibles lignes tracées sur les flancs du granit, où ce couple glissait néanmoins avec l'effrayante dextérité que possèdent les somnambules quand, ayant oublié toutes les conditions de leurs pesenteurs et les dangers de la moindre déviation, ils courent au bord des toits en gardant leur équilibre sous l'empire d'une force inconnue. (注17)

雪と氷の結晶から生じた束の間のダイヤモンドに太陽が悉く火を点けながらこの景色の懐に輝いていたある朝，二人の人物が湾を通りそこを横切ってファルベルグ山麓に沿って飛び，その山頂目指して小壁から小壁へと立ち現れた。それは二人の人間だろうか，二本の矢だろうか。彼らをこの高さで見た者があるとすれば，雲の群れと一緒に飛翔する二羽の

ケワタガモだと思ったことだろう。いかなる迷信的な漁師であろうが，どんなに大胆な猟師であろうが，花崗岩の山腹に轢かれた脆い線に沿って立っていられる力など人間に当てはめることは出来なかったに違いない。そこをこの二人は，あの夢遊病者の持つ恐るべき器用さ，彼らが自分の重みという条件やどんなに些細な迂回にも引き起こされる危険を忘れた時に持つ，正体の分からぬ力に支配された場で均衡を保ちながら屋根伝いに走って行くような，ある恐るべき器用さで滑って行った。

そしてフィヨルドを見渡すこの山頂でセラフィトゥスはミンナに深遠というものを示すが，今挙げた例でも分かるように，この深淵が所謂彼の住処であり，以下の例はそれではこの彼の住処が私たちにどう映るか教えているに過ぎない。

Les abîmes sont assez profonds pour que tu ne distingue plus la profondeur; ils ont acquis la perspective unie de la mer, le vague des nuages, la couleur du ciel; la glace du Fiord est une assez jolie turquoise; tu n'aperçois les forêts de sapins que comme de légères lignes de bistre; pour vous, les abîmes doivent être parés ainsi. (注18)

深淵は深くて，君にはもうその深さが分からないくらいだ。これらの深さは海や雲海，それに空の色が一体になって出来た展望なのだ。フィヨルドの氷はかなり美しいトルコ石だ。君には樅の森が黒ずんだセピア色のぼんやりとした線にしか見えないだろう。深淵というものは君たちにとってこんな装いをしているに違いない。

そしてこの“深淵”とケワタガモがセラフィータ／セラフィトゥスを修飾する形容詞として，またライトモチーフの如く最後の昇天の場面まで伴うのであるが，ここでもう一つ，セラフータがウィルフリッドに与える深淵の種類を見ておこう。

Depuis quelque jours, lorsque Wilfrid entrait chez Séraphîta, son corps y tombait dans un gouffre. Par un seul regard, cette singulière créature l'entraînait en esprit dans la sphère où la Meditation entraîne le savant, où la Prière transporte l'âme religieuse, où la Vision emmène un artiste, où la sommeil emporte quelques hommes; car à chacun sa voix pour aller aux abîmes supérieurs, à chacun son guide pour s'y diriger, à tous la souffrance au retour. Là seulement se déchirent les voiles et se montre à nu la Révélation, ardente et terrible confidence d'un monde inconnu, duquel l'esprit ne rapporte ici-bas que des lambeaux. (注19)

数日というもの，ウィルフリッドはセラフータの所に行くと，体がある淵に落ち込んでしまうのだった。この奇妙な存在は単に眼差し一つで，瞑想が学者を引き込み，祈りが信心深い心を連れて行き，空想が芸術家を連れ去り，眠りが人間たちを運んで行く場に彼の精神を引き込んで行くのだった。というのは各自，より上位の淵に行くための声を持ってお

り，そこに導かれるための案内人を持っているが，帰りにはその全ての者に苦痛があるからである。その場にいる時のみ，覆いが裂け，啓示が，見知らぬ世界の燃えるような凄まじい秘密が赤裸々な姿を見せるのだが，それに対して精神はこの世にそのぼろぼろになった切れ端しか運んで来ないのだ。

アリストファネスによって“引き裂かれた性”，そしてそれをバルザックにあってそれ以前の存在で捕らえることは，そこに磁気のように引きつられながらもどれほどの恐怖と眩暈を与える結果となっていることだろう。そしてこのアンドロジーヌが完全な存在であるならば，最後の章（6章，“天への道”）で，セラフータ／セラフィトゥスの昇天に立ち会うミンナ／ウィルフリッドを通して，その世界から映し出される私たちの姿が，出現したセラファン（セラフィム）の羽に映る“恥ずべき汚れ”として描かれている。地上のエレメントを何か汚いものと捕らえる裏に，どれほど作家自身の罪悪感が存在していることであろうか。確かに心身ともに作家の投影の入ったウィルフィリッドとは，

(…) ces marques dénonçaient un Caïn auquel il restait une espérence, et qui semblait chercher quelque absolution au bout de la terre. (注20)

これらの印は一人のカインを告げており，それに対しては一つの希望が残っていた。彼は地の果てに何か無罪の宣告を探しているようだった。

私たちの意識／無意識の世界の理を“現実 (REEL)”，“想像 (IMAGINAIRE)”，“象徴 (SYMBOLIQUE)”という3つの柱で組み合わせたラカンの理論(注21)を借りれば，確かに死ぬまで書き続ける作家とは人生の謎解きに没頭する存在，作品毎に仮の結論を出して行くイマジネールの側面に身を置く人間であろう。そしてそのテーマは Double としての自己から離れた時，対象を深淵で表現することに旧約の原罪にその形を借りたとはいえ，いかなる罪の意識が謎として残っていることだろう。スウェディンボルグの神秘思想から生まれたこのセラフータ／セラフィトゥスは，堕天使として登場しながら，しかしどんな罪で地上にいるかは問われていないからである。

以上に見られる如き，性の区別に焦点を当てた私たちの存在の二分化 (dédoublement) としての不条理，また二重化された者 (doublé) としての完全な存在に対する憧れは，精神分析の世界，特にフロイド派の分析家たちにとって決して否定されるべき願望として扱われてはいない。クラインは先に挙げた同論文で，更に性の両具性に触れ，それを心理面から取り上げ，私たち個人の中に存在する男性／女性の要素から生じる現象として，女性にあっては男性になりたいという願望，男性にあっては，母親との同一性という心理的ポジションが生じさせる，乳房を持ちたい，子供を生みたいという願望を上げている。これら私たちの中にある二つの要素が上手く統合できない場合の葛藤について，彼女の症例から少し見てみると(注22)，

ある男の患者が夢を見た。その中で「小さい女の子が一匹の雌ライオンと遊んでおり，それ

に輪回しを投げる。その投げた場所の向こうは断崖であった。ライオンはそれに従って跳び，死んでしまう。また，小さな男の子が一匹の蛇を殺していた」。この“小さい女の子”も“小さい男の子”も自分自身であると患者は認めている。クラインはこのライオンと彼女の飼っている猫を結び付け，その連想を「猫→分析医→患者の母親」に遡って原点を突く。それは彼の女性性が母親と競争し，男性性が父親の性能力（蛇）と競争し，両方とも破壊させてしまっている彼の心である。上記の夢は心理的にはこれよりもっと前の錯綜している段階，つまり自己の中の“女性”を破壊している夢に引き続いて見たものである。この夢では「一人の女が非常に高いビルから飛び下り自殺をする。彼は平常の態度とは逆にそれに対して何の恐怖も感じなかった」。これは自己の中の女性要素を現実に破壊したいと望んでいることを示しているものであり，彼は実際，自分の嫉妬心や競争心を全て女性要素に当てはめ，逆に男性の攻撃心の中には率直でより正直な性格があると考えていたのであった。

この症例でクラインは，私たちが自己本来の様々な感情認識に達することが出来るようになるには，自己の中の異性の要素（この場合は女性）の意識化の問題も含まれているということを示している。この患者の場合は，“嫉妬”“競争心”などを女性に投影し，従って自己の女性の要素をどうしても破壊したいと望んでいたのである。そしてこの心理が現実の女性に与えた評価は，“妬み深い”，“不正直”等，否定的なものであり，彼の女性関係に様々な困難を与えていたのであった。この段階を通り抜け始めて，つまり自己の中の両性を認めた段階で，ライオンと蛇に象徴された，自己の同一化の対象，母親と父親に本来持っていた自己自身の妬み心や破壊の心の存在に気がつくのである。そしてこれらの対象から妬みや破壊心を取り除いた時，始めて母親の中の女性性，父親の中に見た男性性に対して抱いたかつての強い憧れが再現したのである。

以上ここでは実際の精神分析の症例や文学作品に現れた，私たちの“他者に投げ出された”陽気でユーモラスなあるいは理想化された，どちらかと言えば楽しい姿を見て来た。次に私たちの二分化／二重化が悲劇となる例を見ていくことにするが，その前にそれでは自我の分裂というものは具体的にどんな現象であるのかごく簡単に触れてみることにする。そのために私たちに分かりやすい形，理論書ではなく，以下のようなメラニー・クラインについてのエピソードを通して探ってみよう。

自我の分裂作用について

以下は，彼女の弟子，ジェイムズ・ガミルが1982年11月，フランス精神分析協会及びパリ精神分析学会事務局がメラニー・クライン誕生百年を祝ってパリで行われた会合で述べた師の思い出からの抜粋であって，公表されたクラインの理輪ではないが，それでも自我の分裂がどんなものか垣間見るには十分であろう。クラインはある時，幾分の苦い痛みを持って「自分の仕事に対する多くの，根拠の間違ったまた不当な批判は，これら自分を批判する人々が，もし子供たちを分析するという労苦をとったものとして，自分のテクニックを使ったなら，修正されていただろうに」と語ったという。この彼女のテクニックというものは，「子供たちが自分たちの感情体験を伝えることを可能にさせるようなあらゆる領域を尊重することを狙ったもの」で

あり，それは特に「彼らの自我の働きに関係したもので，その働きは分析を通して，時にはただ一度の面接においても非常に変化するもの」なのである。また彼はある子供のセラピーについての師の助言を次のように語っている。「ある時，彼女は“君の中のある部分は・・・それからまた別の部分は”という形を取った私のやり方を批判して次のように指示しました。“（患者が示している）内容 (materiel)”は寧ろ，“君は時にはこれが欲しいということもあるし，また時にはあれが欲しいということもある”と提案すべきであると。この時期，患者は反対感情の対立 (ambivalence) という領域の中にいたのだから，ここで分裂作用（のメカニズム）に於いて説明することは，分裂化の傾向を強めてしまうことになるかも知れないからと・・・」(注23)。

フロイド以降，最大の精神分析家と言われるクラインは2歳9か月の幼児を含めた子供の分析から始め，私たちのごく初期の心理研究を通して分裂病に関する多大な功績を残したことで知られているが，その彼女にとって，上のエピソードでも窮えるように自我とは，時々の連続を集成したもの，即ち，分割されたものの集まりではなく，分割され得るものであり，変化するのはその機能なのである。故に，その夥しい分裂化は自我1，自我2・・・と数えられるものではなく，単に弱い自我ということになるのだ。従って，対象も多様性の下に捉えられるのではなく，自己との違いを原点にして存在しているものなのであり，その違った存在との関わり合いは単に否定という動きの中に捉えるものではなく，似たものになるか，あるいは異なったものとして外に“置く”か，つまり同一視作用 (identification) と所有の下に捉えられている。一方その影響下で分割した自我は統合していくものなのである。

Ⅱ．自己所有と空間

私たちは，自己のこちら側における世界を主にビオンの『想像上の双子』で見て来た。分析医から意識化させられ，“双子”が“誕生”した時点で，それは単なる“頼れる誰か”ではなくなり，自己を遮る者となって私たちに生の実現を妨げる内面の葛藤世界の存在を教えてくれている。従って自己を所有した者にとって，所有とは自己でないものの存在に係わり，私たちを外の空間へと導いて行く。だがこの空間に，ビオンの患者の双子が現実に存在した場合，一体事はどのように運ぶのだろうか。それは異性というものに制約されたエレメントだけではなく，本来自己に属する様々なエレメントが自己以外の空間において混ざり合って存在している場合，言い換えれば，そのようなもの (élément, féminin/masculin) を醸し出すのではなく，肉体なり空間なりに実際自己の Double がいた場合，事はどう運ぶのであろうか。この点に関し，10年前実際にフランスで生じたある事件（(注24) とラシーヌの初期の作品，『ラ・テバイード』を通して，次に自己所有，自己の存在の独立性について見ていくことにする。

敵対双子

1983年6月，21才の一卵性双生児の弟が兄を殺した。殺されたのはギィと言い，殺した方はブルノーと言う。彼らは母親が44歳の時に生まれ，父親は未知である。母親は彼らが14歳の時に死んだ。それで二人は施設に入れられたが，その後，後見人となった叔父の計らいで兄が進学教育を，弟は職業訓練教育を受けた後，二人は家に戻り，そこで新たに共同生活が始まった。

ギィは勉強し，ブルノーは外で働いた。家で主導権を握ったのはギィだった。家庭生活はすべてギィの命令通り，彼の欲求通りに運ばれた。子供の頃よりギィは体力的にブルノーに勝り，その性質も乱暴で威圧的，往々にして暴力も振るった。ブルノーはこの暴力にもまして，自分に対する兄の侮辱的な態度に甘んじながら家事一切を引き受けていた。自分の屈辱的な立場に耐えられず，何度か家出をしたが，それも数カ月後には家に戻って来てしまった。

ある日，ギィが恋人ラシダを家に連れて来て，3人で暮らすようになった。それからブルノーがギィを殺した。

裁判で，ブルノーはギィのラシダに対する暴力を見るのが耐えられなかったので，彼女の暗黙の了解を得，兄を殺すことにしたと言う。そこでラシダの昔の恋人ともう一人の友人を含めた3人でギィをカードに誘い，そこで事は計画通りに運んだ。ギィを組紐で絞め殺し，死体を遠くの畑で焼く。事件は1年半たって発覚された。

弟は“ギィが死んでからやっと自分が生きているという感覚を味わうことが出来た”と言ったという。

20歳を過ぎたら殆ど親元では暮らさない，例え未成年であっても勤め始めれば，親元を去って独立した生活を始めるのが普通というフランスの社会状況を前提として考えると，このブルノーの行動は，私たちに奇妙な不安を残す。彼が兄と一緒に暮らさなければならない理由は何もなかったのである。

家庭におけるこの二人の役割は主人／奴隷，父親／母親，男／女など能動と受け身の立場に還元されるだろう。すると，ブルノーは，新たに外から“闖入”して来た兄の恋人，ラシダの中に虐げられていた自分の惨めな姿を改めて認めたのだろう。あるいは彼女の存在がブルノーにとっては自分の立場を脅かすものだったのだろうか。つまり兄を中心とした家庭の中を自分が取り仕切る，兄の面倒を見るという受け身の立場を。あるいは“中心者”としての兄の立場を“乗っ取り”たかったのだろうか。

“消え去ったのは兄”という結果はともかく，この弟が真に追い払いたかったのは兄なのかあるいはその恋人なのかは，事件の動機としては謎である。ともあれ，兄が消え去った後，ブルノーは“自分”が“生きる”ことを発見したのだ。そしてその供述から見ると，それは彼にとって幸せなことだったに違いない。

だが，先に述べたフランスの社会習慣を前提として考えると，つまり生きる空間を変えるという可能性を考えると，果たして自己を“所有”するのに兄を殺す必要があったのだろうか。自己所有が直接他者の抹殺に結びつかないまでも，例えば，物議をかもし出した“他人は地獄だ”というサルトルの『出口なし』の終わりの言葉に窮えるようにそれは往々にして“悲劇”の色合いを帯びてはいる。

上に挙げたフランスの兄弟殺しの空間はそれでも弟の“陰”という選択で2つに別れていた。同一の空間を言わば時間で割ったのだ。自分が“盗まれてしまっている”，他者が“自分の立場を乗っ取ってしまっている”という感情は，フロイトのエディップ（オイディップス）・コンプレックスを現実に生きてしまったかのようである。だが以下に見るラシーヌ描く，ギリシャのオイディップス王の双子の息子たちに起こったことは，この空間を時間で割ることも許さぬ熾烈な戦いであった。それは先に挙げたフランスの双子のように各々自己が能動と受け身の役

割に分割されることもなく，また生きる空間も不動であり，その社会機能が時間空間の中で，二つあるのではなく，一つしかないという条件に置かれている。ここで双子は互いに理解する対象ではなく，一つのものの所有を巡って合い争い果てるのである。つまり時間と空間が移動すれば互いに鏡を見る如くに理解できる存在が，同じ空間，同じ時間の中で，互いに補足し合って重なるのではなく，互いに向き合い，自己の属性は何一つ失いたくはない，少なくても十全であると望む，言い換えれば，相手が自己に望む“役割”に縮小されない自我，自己もまた，相手にそれを投影するのではなく，現実に自分を所有している存在である。それは互いに憎しみしか生じない過剰な自己の悲劇と言えようか。

過剰な自己

『ラ・テバイード』はテーバイのオイディップス王の双子の息子たち，エテオークルとポリニスの王座を巡る争いを描いたもので，自己の運命を遂行し自ら追放者となった父親の意志により，彼らは１年交代でテーバイ王国を統治するようになっている。この交代の時期に当たって，現在の王エテオークルはこのまま彼の統治を願う国民の意志とポリニスがアルゴス王の娘婿になったことを理由に王座を下りることをせず，一方ポリニスの方は神権とも言うべき血統から自己の権利の正当性を主張する。この戦いに彼らの伯父のクレオンはエテオークルに着き，その息子のエモンはポリニスに着く。エモンは双子の妹，アンティゴーヌの恋人である。戯曲は彼らの母親ジョカストの嘆きから始まる。

O toi, Soleil, o toi qui rends le jour au monde,
Que ne l'as-tu laissé dans une nuit profonde!
A de si noirs forfaits prêtes-tu tes rayons,
Et peux-tu sans horreur voir ce que nous voyons?
Mais ces monstres, hélas! ne t'épouventent guères :
La race de Laïus les a rendus vulgaires,
Tu peux voir sans frayeur les crimes de mes fils,
Après ceux que le père et la mère ont commis.
Tu ne t'étonnes pas si mes fils sont perfides,
S'ils sont tous deux méchants, et s'ils sont parricides :
Tu sais qu'ils sont sortis d'un sang incestueux,
Et tu t'étonnerais s'ils étaient vertueux.（Ⅰ—１）(注25)

おお，汝，太陽よ，我らに光を与える汝は，
何故，深い夜の中にその光を置き去っては来なかったのか？
汝はあのような黒い大罪に汝の光を当ててやると言うのか。
そして我らが見ているものを恐怖なしに見ることが出来るというのか。
だが嘆かわしいことに，あれら怪物たちは，汝を少しも脅かさないというのだ。
ライオスの血が彼らを俗悪にしてしまった。

その父と母が犯した罪の後では，
汝は恐れることなく我が息子共の罪を見ることが出来るというもの。
我が息子たちが不実で，揃いに揃って獰猛で，親族殺しだったとしても，
汝が驚くことはないだろう。
汝は彼らが近親相姦の腹から出て来たというのを知っているのだから。
そうだ，もし彼らに徳があったら汝は驚くというもの。（I，1）

太陽が広く，生きとし生けるものに恵みと力を与える存在，社会に於ける正当性を表現する象徴であるとすれば，上記のジョカストが語りかける太陽とは“深い夜”，“黒い大罪”と組み合わされて，何か自らの黒点とも言うべき世界を表しているかのような印象を与える。自分に不幸を課す天に対する憎しみを反映したものとでも言おうか。この特殊な“黒い太陽”とでも言うべき世界の持つ，私たちの道徳的基準が存在していない空間，もしくはそこから弾き出された土壌に住む双子の存在条件がすでに冒頭より示唆されている。

この戯曲は表面から見れば，確かに父親の意志で一つの王座を交互に統治するよう定められた双子たちの運命であり，互いに憎み合うようにされたのは伯父の陰謀の犠牲であるかのように見える。だが，筋が進行して行くにつれて，自らの肉体を含め社会的機能を持ったありとあらゆる空間を巡る争いであることが主人公の台詞で明るみになって行く。そしてこの二人の憎しみは他者の介入以前より存在していたのであり，不幸は互いに空間を移動してそれから逃れることが不可能な血からの運命に置かれていることにある。以下は彼らを仲違いさせ，密かに自分が王座を狙っている彼らの伯父クレオンの台詞である。

L'on hait avec exès lorsque l'on hait un frère.
Mais leur éloignement ralentit leur colère :
Quelque haine qu'on ait contre un fier ennemi,
Quand il est loin de nous on la perd à demi.（Ⅲ，4）

人が兄弟を憎む時，その憎しみは度外れだ。
だが，互いに離れていれば，その怒りは緩くなる。
奢れる敵に持つ憎しみがどんなに強いものであっても
離れていれば，半ば失われるもの。

この伯父の“距離”という考えに対し，彼らの妹アンティゴーヌは二人に必要なのは“もっと多くの空間”であると説く。

La mort seule entre vous pouvait mettre la paix.
Le trône pour vous deux avait trop peu de place;
Il fallait entre vous mettre un plus grand espace,
Et que le ciel vous mît, pour finir vos discords,

L'un parmi les vivants, l'autre parmi les morts.（V，2）

死だけがあなたたちの間に平和をもたらすことが出来たのだ。
あなたたち二人にとって王座はあまりにも狭すぎた。
あなたたちの間にもっと広い空間を置くべきだったのだ。
そしてあなたたちの喧嘩を終わらせる為に，
天は一方を生者の間に，もう一方を死者の間に置く必要があったのだ。(注26)

だがこの空間の機能を持ってしても二人の憎しみが解決できるだろうか。というのはこの憎しみの理が次のポリニスに関するエテオークルの台詞が示す如く，相手の社会的属性に何ら関係のない，その存在そのものに向けられているのが分かるからだ。それは相手そのものより，互いに分離出来ない肉体にあることを示している。

Ce n'est pas son orgueil, c'est lui seul que je hais.
Nous avons l'un et l'autre une haine obstinée:
Elle n'est pas, Créon, l'œuvrage d'une année;
Elle est née avec nous; et sa noire fureur
Aussitot que la vie entra dans notre coeur.
Nous étions ennemis dès la plus tendre enfance.
Que dis-je? nous l'étions avant notre naissance.
Triste et fatal effet d'un sang incestueux!
Pendant qu'un même sein nous renfermait tous deux,
Dans les flancs de ma mère une guèrre intestine
De nos divisions lui marqua l'origine.
Elles ont, tu le sais, paru dans le berceau,
Et nous suivront peut-être encor dans le tombeau.（Ⅳ，1）

彼の傲慢さではないのだ，俺が憎んでいるのは。俺が憎んでいるのは彼只それだけだ。
俺たちは互いに頑なな憎しみを抱いている。
俺たちの憎しみは，クレオン，1年で出来上がったことではない。
この憎しみは俺たちの誕生と共に生まれたのだ。
生が俺たちの心に入り込んだとたん，この憎しみとその黒い怒りが生まれたのだ。
俺たちはまだ幼い頃より敵だったのだ。
何だと？　俺たちは生まれる以前から敵だったのだ。
近親相姦の血が引き起こした悲しく宿命的な結果だ。
一つの同じ胎が俺たち二人を閉じ込めていた間，
母の腹の中で俺たちを引き離す内なる戦いが憎しみの起源を記したのだ。
知っているだろう，この分離の争いは揺籠の中で現れ，

そして恐らく，墓の中にまで着いて回ることだろう。

母体に宿っていた時より，与いに体を分離する動きは，争いとなり，外に出てからもあたかもそれが本能の一つであるかのような機能を負わされる。これでは空間がいくつあっても，あるいは広がりを持っていたとしても変わりはしないことになる。言い換えれば，彼らには空間が存在していないのである。彼らを表現する次のクレオンの台詞が示すように，『抱き締め合おうと望めば，（・・・）互いに窒息するのだ』（“Ils s'étouffent, (…), en voulant s'embrasser (Ⅲ, 4)”）。各々の空間を所有する以前に，言わば自らの肉体を相手から分離できないという絶望の世界，そこでは互いの肉体が互いの片割れになることすらないのである。ここで空間は失われた自己を求める場どころか，互いに一つの肉体の所有権を巡って相争うという窒息の場になるのだ。

On dirait que le ciel, par un arrêt funeste,
Voulut de nos parents punir ainsi l'inceste,
Et que dans notre sang il voulut mettre au jour
Tous ce qu'ont de plus noir et la haine et l'amour.（Ⅳ, 1）

天が，一つの不吉な判決をもって
俺たち両親の近親相姦をこのように罰しようと望んだかのようだ。
そして俺たちの血の中に，憎しみと愛の持つ最も黒きもの全てを
明るみに出そうと望んだかのようだ。

だが，“分離できない”ということは同時に“分離したくない”ということではあるまいか。二人の死闘の様子をアンティゴーヌに描く以下のクレオンの台詞がこの愛と憎しみの奇妙な混じり合いを如実に語っている。相手抹殺という憎しみの決定的な行為の最中，その憎しみを結び付けていたものが愛だったと私たちに告げられるのだ。

Et que jamais leurs cœurs ne s'accordèrent mieux.
La soif de se baigner dans le sang de leur frère
Faisait ce que jamais le sang n'avait su faire:
Par l'excès de leur haine ils semblaient réunis;
Et prêts à s'égorger, ils paraissaient amis.（Ⅴ, 3）

これほど彼らの心が一致したことはありませんでした。
己の兄弟の血の中に漬かりたいという飢えが，
血の繋がっている者がかつて出来たことのなかったことをさせたのです。
彼らは極度の憎しみで結ばれているようでした。
そして今や互いに喉を掻き切ろうとする瞬間，彼らは友人同士に見えました。

ロラン・バルトによれば，“double”のテーマはフラストレーションのテーマであるという(注27)。だが，『宿敵兄弟』と副題されたこの戯曲に限って見てみると，互いに相手を非難する口実として出された“傲慢”という語の夥しい頻度が示すように，それは自己の不在というより寧ろ過剰が問題にされていると言えるだろう。“現実”の双子という自己の形外化に自分が投げ与えたものは純度100％としか言えない憎しみである。私たちはビオンの『想像上の双子』で，憎しみを自己の中に持ち堪えていくことがいかに苦痛であるかと言うことを見て来た。ラシーヌの双子はあたかもそれを排斥しなければならない自己の中の異物であるかの如く相手に投げ出しているかのようである。“Plus il approche, plus il me semble odieux”（Ⅳ，１）（『彼が近づけば近づくほど，厭わしく思えるのだ』p.71)。自己から“分離”させたかったのは正にこの憎しみの感情だったに違いない。それはこういった自己の“悪い部分”を別の悪人という化身を使うことなく，双子という存在に置いたことにすでにラシーヌ自身の悲劇があると言えるだろう。双子を通して押し出された我々の自我はあまりにも自明のものとして映り，そこに測定する深さが存在しない。鏡は我々の姿を映し出すと同時に撥ねつけるからである。そしてラシーヌの別の作品『ブリタニュキス』に描かれたネロンのジュニーへの愛の形に見られるように，ラシーヌの愛の世界は“暗がり”の中に存在し，太陽に象徴される明るみの中での測定がないかのようである。確かにバルトが指摘したように(注28)ラシーヌの戯曲にあって，色彩の使用は稀である。そしてこの『ラ・テバイード』は冒頭のジョカストの台詞に見られる如く，取り分け，光と闇のコントラストの際立ったものになっている。これらの色彩が混ざることがない。ここに見られる空間は，バルザックの紙の上で踊るように活躍する権利奪回の生き生きとしたソジーの広がりではなく，“窒息”の言葉に表現されるように，母親の子宮，揺籠，王座，そして墓に至るまで全て貪欲で滅び尽くされてしまう機能を負っているかのようである。それは他者に化身した，内なる自己に巣喰う憎しみの心が破壊の場を探しているのであろうか。そしてこれらの空間は“分離”したいと願う自己にとって皮肉なことに全て“所有”の原則に基づいているのだ。また一方双子に現れたソジーは本質の所では過剰な自己の自己懲罰の口実に使われているかのようである。ラシーヌの双子は互いに互いの手によって滅びるからである。

以上，Double のテーマに基づき，Ⅰでは所有の概念から欠乏の概念，自己の中の異性の存在を通しての自己所有，そして私たちの中の異性のエレメントの問題を見，Ⅱでは主にラシーヌの作品を通して“憎しみの自己所有”というものを見てきたが，次に『ラ・テバイード』とは焦点の違った分離の心理を挙げ，具体的に自己所有というものがどんなものであるのか概略を探り，次にルー・アンドレアス＝ザロメの日記に描かれた愛における自己所有の考えを紹介して結論とする。

Ⅲ．分離と自己所有

分　離

この概念はごく卑近な所から見てみれば，私たちが這ったり歩き始めたりする時，今までの“母親の胸”にいた世界と別れを告げなければならない，言わば“喪失”の世界を示すものであ

る。だが同時に，這うことも歩くことも私たちに独立の世界を告げている。ここではオブジェはもう自分がそこに抱き上げられるのを待っている存在ではなく，私たちがそこに行こうが行くまいが私たちの自由だからである。即ち，歩くということはオブジェに関する私たちの自由を保証するのである。

母親の胸から自分の肉体の世界へ，これを別離と取るか自己の独立ととるかは心理的な選択である。即ち，対象を自己と一体として見るか，違う存在として見るか。この選択に関して，クライン派のベッティ・ジョセフがこの選択の周辺に漂う感情をある男性の被分析者の症例を通して私たちに次のように見せている(注29)。

出張でマンチェスターに行くことになったからと，Cという患者がある金曜日の面接時間の変更を要求する。そしてこれに関連して彼は主に交通機関への心配，汽車にちゃんと間に合うだろうか，出張先で上手く交通手段を確保できるだろうか，など語りだす。次に彼の話はあるクラブの会員にはなっているがあまり出席していないため，その会員資格を失うのではないだろうかという心配，それから電話で話した友人のやや突っけんどんな態度に移る。Cのこれら“自分が望まれていない”という感じは全て週末ということに関係していることだと分析者は説明する。つまり，語られた心配事は，Cの“閉じ込められたい”という気持ち，出掛けて行く必要がなく，ここ，分析医の所にいて，その中で安全に閉じ籠もっていたいという気持ちに結び付いているのである。するとCの態度は全くリラックスして，話を続ける。自分はいつもこうだ，仕事を変えるのも，服や車を変えるのもCにとっていかに難しいことであるか。いかに彼が何時も古い物にしがみついているか等。つまり先の心配事に似たものを一々例を挙げ始めたのだ。ここでベッティ・ジョセフはCがこの説明の内容を考えるより，上辺だけの形に入って行ってしまっていると考える。つまりCの観点は，説明を受けた自分の不安材料を通して，そこにある心理的な原因とか背景に行く代わりに，“奇妙な習癖”を生み出している結果に向いてしまったのである。話の内容それ自体を見れば的を着いており，それなりの重要さを持ってはいるが，思考はもはや思考ではなくなり，“あたかも面接時にCが内に引っ込んでいられるような肉体の心理的な付随物であるかのようにその中に沈み込むことの出来る，自己を引き込ますことの出来る言葉，分析のための物質のようなものになってしまったのだ”(注30)。この作用により離別の問題は，心理的にも肉体的にも回避することが出来たのだ。この心理的からくりを指摘されて始めてCは本来の不安に気がつく。ショックを受けた彼は“マンチェスターが私の心の中に入り込んで来ました。それは何か私の中にナイフを突き刺しているみたいだ”と答える。これに対して分析医はCの胸に入り込んだナイフの意味とは，Cを現実の世界に押しやるという分析者の行動を象徴するものではなく，Cと彼女の間に入り込んだナイフのことであり，彼らを分け，彼が自分の分析医とは違った存在，外にいる存在であるということに気付かせるものなのだとしている。

捉え方によってはかなり手厳しい指摘になるかも知れない。こうなると，分析医とは，もはや私たちを“支えて”くれる“良きオブジェ”ではないからだ。だが，分析の核心とはフロイトからクライン，それにラカンにまで一貫して流れているもの，果てはソクラテスにまで遡る，“汝自身を知れ”の考えなのである。言い換えれば，自分の存在を支えてくれるのではなく，“自分を知ってくれている”存在なのだ。そしてジョゼフのこの症例が私たちに見せてくれるのは，

別離の始めての経験を乗り切れなかった者の引き擦る一種の跡のようなものの中にいる自己であろう。大人になるとこのCという被分析者のように，馴染みのない場所や新しい服を身につけること，車を買い換えること等が何故，自分に限って難しいのだろうという疑問，そしてそこで出す結論はせいぜい，“自分は古いものにしがみつく傾向がある”という自己の“奇妙な”習癖ぐらいであろう。そして理性では分からないそういうことの一切が一体，“自分に何が生じているのか”という問題投機までには行かないものである。

では，完全な存在としての自己所有が実現した時，対象はどう捉えられるのであろうか。以下はルー・アンドレアス＝ザロメの考察である。

愛における自己所有

「愛に於いて，私たちは“与えるもの”になる。私たちは私たちを与えるのだ。愛の中にあって，私たちは以前よりもっと存在感を増し，もっと広がり，もっと自分自身に密接に繋がって行く。

このことは私たちの本性 (nature) に向き合う第２者（それが男性か女性は場合による）にも当てはまる。そういうことがなければ，私たちの本性とは何の権利もないものと見なされて，存在の戦いの中でぼんやりとした無為の日を送るか抑制された生活に慣れてしまうのだ。私たちを“与える”ことによって，私たちは愛する者のイメージの中で私たちを完全に“獲得”するのである。上辺は慎ましいその愛する者のイメージの中に。

私は，概して，より深いあるいはより人間的に貴重な関係とは全て，こういった性質を持っていることを見出した。そして，そこに，不断の戦い――その上に，そこでの最後の言葉は“一方のもう一方に対する勝利”ということに止まっている――から来る自己中心主義しか注目しないとは空恐ろしい凡庸さでもない限り出来ないと。人間がぞっとするような表現，“半身”として表現されるのはここにあるのだ。男性であれば，自己抑制が一つの体験にさえならない鈍感な半分として，女性にあっては踏みつけにされた半分として。そしてこの踏みつけにされた半分とは，時には本人たちもびっくりするように寡婦になって花開くのである。つまり，それが男性にあっては逃げ場であったり，魅惑であったりするものになるのだ。二つの存在が一つ以上のものになるのだ。もはや互いに立ちはだかる（一つの全体を形成するために互いにくっつき合おうと試みるこれら哀れな“半身”のように）という目的をなくすのではなく，外側で人間的な目的を一緒に探すということになるのは，男女間の本質の交換という二重の結果を通してのみである」(注31)

この日記は1912年に書かれたものであるが，80年代フェミニスムのスローガンの先触れを見る思いのする，かなり辛辣な意見も窺えよう。互いに自己を所有した者たちにとって，相手の存在は互いの本質交換という役割に過ぎず，従って嫉妬という所有の感情も生じて来ない訳である。ひとつ“本質”というトリックを見てみれば，これはエレメントの交換とも言えよう。エレメントだけになった相手はあるいは自己は，そんな相手のエレメントを一種の“囮”で導き寄せることも可能になるのだ。極端に言えば，男性が女物で飾り，女性が男性の仕種をし，そこに自己ではなく相手の本性を映し出す（逆も同様）というナルシスト達の世界が展開することになる。何を持って愛とし，何を持って独立とするか，同一視（相手と同じようになりた

い／相手に似たくない）と所有の狭間で，私たちの感情生活は様々な悲喜劇を生み出して来たことではある。

注

1）1931年5月9日，フロイドよりルー・アンドレアス＝ザロメへ。Lou Andreas-Salomé, *BRIEFWECHSEL. SIGMUND FREUD LOU ANDREAS SALOME 1912-1913/ IN DER SCHULE BEL FREUD.* 尚，訳は仏訳，*Correspondance avec Freud suivie du Journal d'une année* (1912—1913), Edition Gallimard, Paris, 1970, p.238. より。

2）Melanie Klein, "On the Sense of Loneliness" in *The Writing of Melanie Klein,* The Hogarth Press, London, 1984. vol. Ⅲ. これは1963年の，彼女の死後出版であり，生前，著者の手によって出版社に渡されたものではなく，編者はクラインとしては更に推敲を重ねるつもりであったとしている。

3）*ibid.,* p.302.

4）Melanie Klein, "Notes on some schizoid mechanisms" in *The Writing of Melanie Klein, op. cit.,* vol. Ⅲ.

5）Balzac, *Correspondances,* Garnier Frères, 1966. 尚以後のバルザックの手紙の引用はこの書による。

6）Wilfred R. Bion, "The Imaginary Twin" in *Second Thoughts,* Heinemann London, 1967 ; reprinted in H. Karnac Books, London, 1984, pp.3-22.

7）"On the Sense of Loneliness" in *The Writing of Melanie Klein, op.cit.,* vol. Ⅲ. p.302.

8）Aという名称は，ビオンが当論文の最後に他の2つの症例を持ち出した時，後者の2人の患者と区別するために用いたものであるが，ここでは便宜上始めからこう呼ぶことにする。

9）イタリックは筆者。

10）Balzac, *Lettres à sa famille,* Paris, Edition Albin Michel, 1950.

11）Freud, *Zur Einfuhrung des Narzissmus,* 1914，参照。

12）訳は仏訳より。Platon, *Le Banquet,* Paris, Gallimard, col. "idée", 1950, p.72.

13）*ibid.,* p.73-74

14）Balzac. "Séraphîta" in *La Comédie Humaine,* Paris, Ed. Gallimard, Coll. ≪la Pléiade≫, vol X. 1937. p.476.

15）*Ibid.,* p.481.

16）*Ibid.,* p.511.

17）*Ibid.,* pp.464-465.

18）*Ibid.,* p.468.

19）*Ibid.,* p.486.

20）*Ibid.,* p.532.

21）Jacques Lacan, *Les Sémminaires.* Edition du Seuil, Paris, 1975, vol. Ⅰ, pp.297-298 参照。

22）"On the Sens of Loneliness" in *The Writing of Melanie Klein, op.cit.,* vol. Ⅲ. pp.306-307.

23）James Gammil, "Quelques souvenirs personnels sur Mélanie Klein" in *MELANIE KLEIN AUJOURD'HUI,* Cesura Lyon Edition, Lyon, 1985, p.38.

24）事件の内容紹介は HOROSCOPE N °443, Edition Nuit et jour, Levallois-Perret, 1987. より。

25）Racine, "La Thébaïde" in *Théâtre Complet,* Garnier-Flammarion, Paris, vol. Ⅰ. 1964. 尚これより以下，原文の終わりのローマ数字は幕を，アラビア数字は場を表す。

26）この時点でアンティゴーヌはエテオークルのみならず，ポリニスも死んだという真相をまだ知らされていない。

27）Roland Barthes, *Sur Racine,* Edition du Seuil, Paris, 1963, p.32

28) *Ibid.*

29) Betty Joseph. "Transference : the total situation" in *Melanie Klein Today,* Routledge, London, vol. Ⅱ. 1988. 但しこの症例の目的は"別離"ということではなく，Transference/total situation というタイトルが示すように分析者，被分析者共々が陥りだちな罠，分析の進行を妨げる患者側から出される素材と分析全体の状況との食い違い，即ち，"what was going on" の観点から取り上げたものであるが，"分離"（別離）のテーマに合わせて，ここで扱うのはその部分だけとする。

30) *Ibid.,* p.70 "(The thougts) had become words, concrete analytic objets into which he could sink, get drawn in, as if they were the mental concomitant of physical body into which he was withdrawing in the session."

31) Lou Andreas-Salomé, *Correspondance avec Freud suivie du Journal d'une année (1912-1913), (BRFWECHSEL. SIGMUND FREUD LOU ANDREAS SALOME 1912-1913/IN DER SCHULE BELFREUD), op. cit.,* pp.298-299.

Double/Le moi fantasmatique et imaginaire littérature et psychanalyse

Tomoko OHARA

RÉSUMÉ

Aristophane, ainsi qu'il le déclare dans le Banquet de Platon : "c'est depuis un temps aussi lointain, qu'est implanté dans l'homme l'amour qu'il a pour son semblable." Ce discours de la dualité de notre existence sentimentale, nous invite à penser, en contrepartie, au problème de la possession de soi. En effet, depuis Freud, la psychanalyse s'est preoccupée de ce phenomène de la recherche de soi-même sous le terme de la "dissociation de soi", faite soit par l'amour soit par la haine.

Nous avons donc essayé, en premier lieu, d'établir la notion de double, étudiant la theorie de "l'identification projective", introduite par Mélanie Klein.

Ensuite, nous avons introduit "le jumeau imaginaire", un article de W.R. Bion, dans lequel il nous montre le monde schizophrénique de son patient.

Et pour finir nous avons analysé deux romans français : *Séraphîta* de Balzac et *La Thèbaïde* de Racine. Dans le premier nous avons vu l'amour idéal de l'androgyne qui réunit deux personnages, tandis que dans le dernier, nous avons apprehendé le monde de notre "double" fait par la haine à travers la description du meurtre mutuel des jumeaux.

DOUBLES/THE IMAGHNARY AND PHANTASIZED EGO (Literature and psychoanalysis)

Tomoko OHARA

SUMMARY

According to Aristophanes, 'From time immemorial it is destined for man to love that which is like himself.' This statement of duality of our emational existence, which appeared in Plato's "The Banquet", forces un in return to think about the problem of self-possession. Since Freud, this phenomenon, in cases of love or hate, has been termed "dissociation of self".

We have tried, firstly, to establish the concept of "the double", according to Melanie Klein's theory of "projective identification". Secondly we introduced Bion's article "The imaginary Twin" (1950), which has shown us his patient's schizophrenic world.

Finally we analysed two French novels ; *Séraphîta* by Balzac, and *La Thébaïde* by Racine. In the former we saw the aspiration to be the perfect being transformed into the figure of the androgynous, (which we can call the aspiration for self-integration). In *La Thébaïde*, through the story of the twins mutual murder, we discussed the self-hatred arising from the urge to escape from our own personality, as opposed to the love of our double.